

彼自身によるフィリップ・ソレルス 著者による『 「時間」の旅人たち』についての論評

著者	小山 尚之
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	11
ページ	70-81
発行年	2015-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000509/

彼自身によるフィリップ・ソレルス — 著者による『「時間」の旅人たち』についての論評 —

小山 尚之*

(Accepted October 20, 2014)

Philippe Sollers by Himself — Commentary on "*Les Voyageurs du Temps*" by the Author —

Naoyuki KOYAMA*

Abstract: This article is a translation into Japanese of the dialogue between Philippe Sollers and Nathalie Crom, which took place at the center of Pompidou in 9th February 2009. They talk about Sollers's latest novel "*Les Voyageurs du Temps*" that was also brought out in January 2009. In this dialogue, they have a long discussion on the following subjects : genre of novel, what is novelistic for Sollers, reading and writing, quadridimensional time, Gnosis and poetry as the spiritual fighting. This interlocution appears as a commentary on the book by the author himself and at the same time it seems to be a good guide to read "*Les Voyageurs du Temps*".

Key words: Philippe Sollers, Beaubourg, Nathalie Crom, *Les Voyageurs du Temps*

はじめに

フィリップ・ソレルスは二〇〇九年に小説『「時間」の旅人たち』を上梓している。おそらく小説の刊行後間も無いであろう同年の二月九日にポンピドゥー・センター（通称ボーブル）においてソレルスはナタリー・クロンと同作をめぐる対談を行った。この対談は二〇一一年春の*L'Infini* 誌一四号に「ボーブル」というタイトルで掲載されている¹。これは著者自身による自作解説といった趣を呈しており、『「時間」の旅人たち』を読むうえで有益な発言に満ちている。本稿はその対談を翻訳したものである。

尚、「ボーブル」の中で付されている脚注について付言しておきたい。本稿における脚注は最初の脚注1と12、13だけが翻訳者によるものであり、それ以外はすべて元のテキストに施されているものである。

ボーブル

フランシヌ・フィギエール : 今夜、ポンピドゥー・センターにフィリップ・ソレルスをお迎えするのを情報公共図書館はとてもうれしく思っております。彼はフランスの文壇的舞台と文学における主要な人物であり、小説家、エッ

セイスト、雑誌『ランフィニ』およびガリマール出版社における同名のコレクションの創刊者、編集長です。ひとつのスタイルと固有の宇宙を明示しつつも、その著作、特に今日では二〇以上にのぼるその小説が辿っている多様性を通して、フィリップ・ソレルスは現代文学の実験を行ってきたように思われます。ロラン・バルトは『作家ソレルス』の中で言っています。ソレルスは「生のエクリチュール」を実践している、と。引用します。「ソレルスにおいては、私はこれを確信していますが、一定のテーマがあるということであり、それは何かといえばエクリチュールであり、エクリチュールへの献身です」。このエクリチュールへの献身は、もちろん読書と文学への献身というもうひとつ別の献身に密接に結びついています。私はその秘密を解明する試みをナタリー・クロンにお任せします。ナタリー・クロンは文学関係のジャーナリストであり、『テレラマ』誌の「本」部門の責任者です。女性のみなさん、男性のみなさん、楽しい夜をお過ごしください。

ナタリー・クロン : フィリップ・ソレルス、われわれの招きを受け入れてくださりありがとうございます。それではまずソレルスの紹介を数語で行いたいと思います。もちろんフランスの文学的光景と呼ばれ得るものの中での五〇年間のエクリチュールと存在を数語で要約するのはと

* Department of Marine Policy and Culture, Division of Marine Science, Graduate School, Tokyo University of Marine Science and Technology, 4-5-7 Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京海洋大学大学院海洋科学系海洋政策文化学部門)

1 "Beaubourg" dans *L'Infini*, printemps 2011, no114, Editions Gallimard, pp.32-48.

でも不十分に思われるでしょうが。出版された六五冊の本（小説、エッセイ、選集）のうちで一番最初のは『奇妙な孤独』（一九五八年）、それから『「時間」の旅人たち』までです。後者は今ガリマール出版社から出版されています。われわれは今夜この本について詳しく語っていくことにします。いくつかのタイトルも挙げておきます。『ドラマ』、『教』、『法則』、『樂園』、『女たち』、『賭博者の肖像』、『絶対的な心』、『フォーリー・フランセーズ』、『秘密』、『ステュディオ』、『神聖な生』、『趣味戦争』、『無限礼賛』などです。

フランスの文学的光景におけるあなたの存在は二つの雑誌を通して現れています。それらの雑誌はその時代を画しましたが、おそらくそれを超えています。六〇年代、七〇年代は『テル・ケル』誌²、一九八三年からは『ランフィニ』誌³です。『アート・エクスプレス』誌で『「時間」の旅人たち』に割かれた美しいテキストの中でジャック・アンリックは言っています。あなたの様々な本はまるで「新たなオデュッセウスの相次ぐ旅程」のようであり、「その冒険譚はギリシアのオデュッセウスのそれよりも奇妙で、ありそうもなく、思いもつかないものだ。というのもこの場合人間主体にとって問題となるのは海を踏破し出発点に戻るのではなく、時間の中を旅することなのだから」。フィリップ・ソレルス、あなたが企てられたこの時間の中の旅についてこの機会に説明し、そしてこれが長期間にわたる旅であることを強調して頂こうと思います。またあなたの作品が最初から示している深い一貫性、疑いのようなない恒常性、執拗さを思い起こさなければならぬでしょう。この点を私が引用したばかりのジャック・アンリックからの抜粋は暗黙のうちに指摘しています。おそらくあなたはわれわれの前でこの旅の現在位置について明確にしてくれるでしょう。われわれはいまこの冒険航海のどこら辺りにいるのか？

しかしまず始めに、あなたが了解なさっている意味での小説のジャンルの問題に言及しようと思います。この問題はときにある種の読者の無理解を引き起こしています。あなたは『旅人たち』で、「ストーリー」や語りから解放された、以下のような文学からは遠い文学について語っています。つまり——引用します——「家族小説、心理小説、社会派小説、ロマン主義的で感傷的な小説」すなわち「少しずつ明白となり助長させられている無知の陳列棚にうずくまっている小説」です。

フィリップ・ソレルス : 「陳列棚にうずくまっている

小説」という言い回しはイジドール・デュカス、別名ロートレアモンのもので。彼はとても早い時期に文学と小説の深い危機があることに気づきました——ちょうど何人かの人物、たとえばマラルメ、あるいはあなたがたがこの庭に憑き纏うのを、またはこの庭に実際にいるのをご覧になった何人かのように。しかし「陳列棚にうずくまっている小説」とは、現代の用語で「小説の基層」とも呼び得るようなものです。この基層は商品の次元に属しています。これが、文学のマーケティング用語で言う今日ではアングロ・サクソンの小説のほうが機能し、フランスの小説のほうは窮屈で、家族的で、骨が折れるものに見えるようにしているのです。私が「本格的な」小説を書かないとひとが言うとき、私に聞こえるのは真面目な文学批評の声ではなく、市場の声です。市場はチャップリンの『独裁者』のように私を呼び止めます。私がどこにしようと、突然市場の姿があらわれるのが見えます。それは私にこう言います、「お前、本格小説を書いていないな」、と。これはどんな所にも私を追い掛けてきます。私の家にまでです。特に招待客がこう言うときです、「残念ですね、あなたは本格的な小説はお書きになっていないですね」。

原則として商品は商品なのですけれど、『「時間」の旅人たち』はまったく別物なのです。この種の作品は時間の中でときには著しい遅れを伴いますが、是非とも必要だったし、今後必要でしょう。しかしそういった作品の歴史は本当に小説的です。ロートレアモンの『ポエジ』、ランボアの『地獄の季節』や『イリュミナシオン』に起こったこと以上に小説的なものがありますか？ ボルドーでのヘルダーリンの生活以上に小説的なものがありますか？ これを言っている今、私はあたかも私が読みたいと思っている小説を読んでいるかのような感動を覚えます。ついに啓示がここに！ しかしこの種の小説的なものは、結局、だれの関心も引きません。何故なら市場にとって小説とは、映画を見るためにひとが開く本だからです。ひとは「ストーリー」を生き、面倒なことを抱えている登場人物たちに興味を持ちます。というのはもし面倒なことがないと、小説も存在しなくなるだろうからです。行き詰った愛、勝ち誇る暴力。九月一日はいたるところにあります。ひとはもはや何の中を這いずり回っているのか分かりません。おそらく田舎の、たとえばミニユイ社の出版物にあるような一種の深い粉塵の中にいるのかもしれない。それが本格的な小説というやつです。こんにちにおける個々の人生の行き詰った物語を一步一步追うことができる本のことで

2 『テル・ケル』（一九六〇年～一九八二年）はフィリップ・ソレルスとジャン＝エデルヌ・アリエ（彼は一九六二年に除名されるだろう）の発意のもとスィユ出版社で創刊される。一九六〇年三月の第一号は次のニーチェの引用で始まっている。「私は世界が欲しい、それもあるがままの世界が欲しい」 *Je veux le monde et le veux tel quel*. この雑誌は反サルトル的なマニフェストとして現われ、政治的なあらゆるアンガジュマンからエクリチュールを解放することを欲している。次を見ること。 www.pileface.com/sollers/IMG/pdf/telquel.pdf.

3 一九六〇年に創刊された『テル・ケル』は消滅し、それは『ランフィニ』という名のもとにドゥノエル社で、次いでガリマール社で一九八三年に生き返る。この雑誌はフィリップ・ソレルス、ジュリア・クリステヴァ、マルスラン・プレネなどのテキストだけでなく、若い作家のものや、フィリップ・ロス、ミラン・クンデラ、セリーヌといった大物の署名のあるテキストを公刊する。『ランフィニ』は、情報の爆発と多種多様なコミュニケーションのネットワークの時代にあって、文芸雑誌は必要であり、これからも必要であろうという賭けに賭けている。次を見ること。 <http://www.gallimard.fr/catalog/html/revue/inf.html>.

私がやろうと試みているのはこれとはまったく別です。そういう訳でひとびとにあれほど共有されている無理解が生じるのです。しかしそれは全然重要ではありません。私は思考と生活が有する小説的なものを、「時間の旅人たち」の冒険と私が呼んでいる冒険の中で、表現しようと試みているのです。したがって私は私の時代の本格的な小説を作っていると主張します。残りのすべては、あなたがすでにお忘れになったすべてのように消えていくでしょう。すでに煙の奥に消えている大部分の映画やテレビ番組のように。

ナタリー・クロン : 『「時間」の旅人たち』の中であなたはこう記しています、語り手は記憶と記録文書を通じて大いなる戯れを企てた、と。これもまたこの小説の定義となり得るのでしょうか？

フィリップ・ソレルス : はい。こんにちは私にこのうえなく小説的だと思われるのは、あれらのとても興味深い冒険を出現させることなのです。カフカの生活は非常に面白い。ロートレアモン（Lautréamont）の生活もそうです……。そういう理由から私はリール通り五番地へ行きました。そこにいた銀行家のダラスのもとに、イジドール・デュカス（Isidore Ducasse）、すなわちロートレアモン伯爵は、父からの金を受け取りに来ていました。父はモンテ・ヴィデオ（Montevideo）に住んでいたのです。彼がその住所に赴いたのは、自分の作品を絶対に印刷させると望んでいたからです。これ以上に小説的な何かがありますか？ 幸いなことにアンドレ・ブルトン（André Breton）とルイ・アラゴン（Louis Aragon）が一九一九年に国立図書館でこの物語を掘り出しました。それがなかったらあなたはこのことを知らないでしょう——もっとも誰もこのことを知りません、というのも誰も読んでいないからです。私にとって非常に興味深いのはこういうことです。イジドール・デュカス、ロートレアモン伯爵というひとりの青年、彼はパリ・コミューン（Paris Commune）の間に二四歳で死ぬでしょうが——パリでは餓えてひとが死んでいました——その青年が、著者払いで『ポエジ』（これは将来の本のための序文です）を印刷させるために、自分の銀行家の家のあるリール通り五番地へ金を受け取りに来るのを見ることほど小説的なものがありますか？

ではどうしてこれが小説的なのでしょうか？ 何故ならこれがラカンの住所と同じだからです。次のように言うことほど小説的なものはありません。私はセバスチアン・ボタン通り五番地から——ここにあるガリマール出版社の中庭で私は生きているひとびとと出くわす（おそらく死者たち以上に）のですが——リール通り五番地へ行く。その中庭で私は金を受け取っている最中のロートレアモンに再会する、と。このようにやって来る想起の小説的な力を誰も気づかないというのは異常なことです。まるで私が死者たちを生者たち以上に生き生きと呼び出しているかのようですね。

ラカンとは大の仲良しでしたが、彼はリール通り五番地

に住んでいました——ちょうどマックス・エルンスト（Max Ernst）の家のすぐ隣です。私は一日の終りになるとラカンの家に行き、その真向かいにあるラ・カレーシュ（La Carrière）で一緒に夕食をとるために、彼を呼びに行ったものです。彼は大きな溜め息をつけていました。一日中小説的なたわごと、つまりは神経症のたわごとを聴いていたからです。もうそれ以上は無理でした。このようにして彼は金を稼いでいました。札束でポケットは一杯でしたが、それというのも彼は厳密に支払わせていたからです——変わったひとですね！ ラカンの生活、それはとても小説的です。ひとびとは自分が言っていることが何だか分からないので分析治療してもらおう。そしてその代金を支払いにラカンの家に来ていたのです。私のほうは、ただで夕食にありつくために、そこへ行っていたのです。これは小説的ではありませんか？

ナタリー・クロン : こうも言えませんか、ある意味であなたは、あれらの著者や作品と対話している？ そしてその著者や作品は過去のものではなく完全に現在のものである？ あなたにとって、読む行為と書く行為のあいだにどんな関係が存在するのですか？ それは同じことから生じているのですか？

フィリップ・ソレルス : もちろんそうです！ 読書はいまや絶え間なく荒廃している状態にありますから、エクリチュール（Écriture）も同じようになるでしょうね。以下は公式です。書く術を心得るには、読む術を心得ねばならない。そして読む術を心得るには、生きる術を心得ねばならない。あなたはこの公式をあらゆる方向にとることができます。たとえばもしあなたが読む術を心得ていなければ、書くにはおよばない、という風に。関心に値するあらゆる著述家はみな驚異的な読書家です。すなわち彼らは過去を現在に招集しており、それゆえにまた未来に向かっても存在しているのです。誰だか忘れましたがある出版社のひとが私に言いました。「若い詩人たちと会うことがあるんだが、《何を読んでいるの？》と彼らに聞くと、《いやー、何も！ 影響されたくないんで》と答えるのだよ」。その正反対だというのに。そして読む術を心得るには、生きる術を心得ねばならない。生きる術を心得るとはどういうことでしょうか？ とても重要な問題です。ひとはどうにかこうにか生きている。多少ぼんやりとして、無知で、自分に満足して、隣りで何が起っているのかに無関心で、たとえば大量殺戮にも無関心で。ところで生きる術を心得るとは、読むすべを心得ることなのです。もしひとが読む術を心得ていなければ、これは何の意味もなさないのです。

ナタリー・クロン : 読む術を心得ること、それは生きる術を心得ること。そして生きる術を心得ること、それは読むすべを心得ること。これは二方向に作用するのですね。

フィリップ・ソレルス : そう、それは互いに支え合っ

ています。あなたもご存知のようにあらゆる著述家は大変な読書家です。ひとはこのことを忘れる傾向にあります。まるで実際に生きられた証言や、社会的な経験が詳細に報告されるという理由で書かれることになる小説の中にこそ、獨創性、自発性、真正さがあるかのようです。社会的なものにたいする信仰は、かつての神への信仰と同じ次元に属しています。神は社会となりました。社会的でないものすべてには何の重要さもないのです。しかし小説の中で社会的な所与をリアリスト的に自然主義的に再生産することはもう終わっています。そのような小説はこれまでもあったし、これからもずっと同じものであり続けるでしょう。陳列棚でうずくまっている状態で、すなわち小説の基層で、つぎつぎとローテーションしながら。急を要する問題は別のことです。それは深みにおける言語そのものの問題であり、ポエジです。というのも生きる術を心得るには、ポエジが何であるかを知らなくてはなりません。それがなければひとは生の傍らで生きているのです。

ナタリー・クロン：『趣味戦争』の中であなたは書いています、「読むこと、それは何よりもまずおのれ自身のうちへ入ることであり、自分のことを記号とコード化されたメッセージと判じ物で出来ているひとつの世界であると見なすよう学ぶことである」。

フィリップ・ソレルス：生きているという事実は自明のことではありません。それは自明のことである、社会がそれを産み出している、と考えるひとはみな、傲慢となり得るし、自分が存在するのは正当化されていると感じることでしょう。ところで、私の友人のひとりも言っているのですが、「歴史」は何故今朝、あるいは昨日の朝始まらないのでしょうか。歴史的な側面は私にとって全くの緊急問題です。その問題を除去すればするほど、ますます読書は減るでしょう。したがって生きることも減るでしょう。「歴史」、すなわち超越的な時間の尺度を理解すること、それが何よりも重要です。こんにちでは読書にかんする記憶喪失と昏睡状態を組織するためにすべてがなされています。もし本がよい映画となるのであれば、市場はそれを「本格的な」小説だと決定するわけです。それゆえ私は、ここでついでに、私が「本の都市」と呼んでいる、あの大変興味深い、世界の中の飛び地に、敬意を表したいと思います。私がそう言うのはアントワーヌ・ガリマールがここにいて私の友人だからではないのです。このプロジェクトはひとつが思う以上にずっと重要です。というのも歴史的な記憶を包蔵する場というのはほんの僅かしかないでしょうから。すくなくともそういう場がひとつあるのです、結構なことです！

ナタリー・クロン：あなたの言う「時間の旅人たち」とは、著述家、音楽家、詩人、画家たちのことで、久しい以前からあなたに同伴しています、たとえばランボー、ロートレアモン、ニーチェなどです……。本から本へと彼らと

対話しているあなたがいいつも見出されます。『「時間」の旅人たち』の中であなたはお書きになっています、彼らは四次元的な時間に住んでいる、と。過去、現在、未来、そして始まりと終わりに同時にある第四項を有する時間です。これをわれわれに説明していただけませんか？

フィリップ・ソレルス：二〇世紀は、そのあらゆる事件とともに、われわれからすでに遠くにあります。われわれは地球規模の時代に突入しました——われわれはもはや「近代」les Temps Modernes にはいないのです——そしてそのことを感じさせることが重要なのです。そのために私はダンテを卓越した立場におきました。突然ダンテが聖トマス・アクイナス教会に在ることがあり得ることを示すためです。聖トマス・アクイナスとは誰でしょう？ 『神学大全』なんてみんな馬鹿にしています。もしあなたがダンテの『神曲』を手にするのであれば別です。彼は聖トマスをあなたに紹介します。

「詩人」という用語より「冒険家」「戦士」という語の方を私は好みます。というのも、マンデルスタム⁴が言うように、「ポエジ、それは戦争である」からです。戦争とは次のような意味です。ある一定の時間の中に与えられたひとりの人間が世界全体に反対するには道理があり、この世は全部嘘であることを確信して、自分自身のために行動し、やがてみずからの真実を表明し、徐々にその価値を知らしめるのに成功することを言うのです。『神聖な生』という私の本ほどニーチェの日常に関して正確な何かがあると私は思っています——私が誤っている場合は別です、しかしそれならその反対を私に証明する必要があります。この本はニーチェがその日どんな体調であるのか、その日の天気や、家族経営のペンションの宿泊者用のテーブルで何を食べているかを描写しています。何しろ彼はそこにいる気のいい女たちのくだらぬ言動とその時代の愚かさに完全にかき乱されていたのですから。

今朝読み返してきたものをあなたにこれから読んでみようと思います。これは、いくつかの雑誌での私の本の受容に関するやや辛辣な小さい記事を私が一本書くのに役立つかもしれないし、そうでないかもしれませんが。具体的な実例をあげます。『ル・モンド』紙にきわめて意味深長に共感をこめて発表されたミシェル・ウエルベックの母親のインタビューを、私は最新の小説の中で活用した——これは私が大いに非難されたことなのですが——この事実について私は熟考しました。あのドキュメントは——私の意見では、息子との関係における母親を暴露するものとして人類史上記録し得たすべてを凌駕するものです——途方もなく暴力的であるにもかかわらず、うやうやしく写真入りであの新聞に載っています（やはりこの新聞はわれわれの『プラウダ』です）。そこに、哀れな母親が、息子はステッキの一撃をその口に受けることしか値しないという裁定を下しているのが見られます。そこで私は、わが「時間の旅人たち」にたいして、誰が程度の差こそあれ自分と母親と

4 オッシップ・エミリエヴィッチ・マンデルスタム、ソヴィエトの詩人、エッセイスト（一八九一年～一九三八年）。

の関係語を語っていたかあえて自問してみたのです。するとあれらの著述家たちはみな母親と悶着がありました。ランボー、ヘルダーリン、ニーチェ（彼は妹についても語っています）、そしてボードレール……。ボードレールのこの詩はご存知でしょう、

至上の力持つ神の命令に従って、「詩人」が
 退屈きわまりないこの地上に現われる時、
 恐怖に襲われた母親は、瀆神の思いに胸ふたぎ、
 神に拳を振り上げる、憐みの目で見守る神に。
 《ああ、どうして蝮の群をでも生まなかったものか
 ……》⁵

ボードレールは、そして彼が最初の人物なのですが、詩人とポエジの出現にたいする母親の激しい嫌悪があるという事実を際立たせています。この世は退屈している。そして詩人の母親とはボードレールの母親のことです。ここには何か目をくらませるようなものがあります。というのもミシェル・ウーエルベックは重要な小説を書いています、真にポエジまで行くことができないので苦しんでいるからです。では母親たちというはポエジの存在を妨げるための一種の地下同盟なのでしょう。これは、ボードレールによりますと、退屈なこの世に留まらねばならないことを意味するでしょう。ところでマラルメはこの問題を反転させました。何故なら、

永遠がそのひとつをついに「そのひと自身」に変えてしまふ、そういう者として、
 「詩人」は、抜き身の剣でもって恐怖に襲われたその世紀を掻き乱す……⁶

とあるからです。でもこれではうまくいかない。どうして世紀が恐怖に襲われたりするのでしょうか？ 私はいま世紀を恐怖で襲っている最中でしょうか？ とんでもありません。その代わり「恐怖に襲われた」*épouvantée* という語で——お気づきですか、ボードレールもマラルメも同じ語を使っています——母親に標的を定めるという問題ですが、これは一体何を意味しているのでしょうか？ 母親を恐怖で襲うとはどういうことなのでしょう？

『悪の花』の序文草稿のひとつでボードレールはこう書いています。「この世界は厚い卑俗さを獲得した。そのよ

うな卑俗さは、精神的な人間の軽蔑に、ある種の情熱の激しさをそそぐものだ。しかしこの世には毒すら浸透しえぬ幸せな甲殻類のひとつとびとがいる。私は、憎悪から喜びを引き出し、軽蔑のさなかで栄光を感じる幸せな性格のひとつを持ち合わせている。痴愚を悪魔的に愛する私の趣味から、私は、中傷による誤解の中に特別な快樂を見出すことができるのだ」。

彼は『悪の花』の序文を書くのでしょうか？ 全くそんなことはしません。彼は有罪判決を受け、有罪となった詩篇は一九四九年になってやっと公刊されました。これはラクローの『危険な関係』やジョイスの『ユリシーズ』のようでもあります。『ユリシーズ』は合衆国で有名な裁判沙汰を引き起こしました。こんにち誰がこんな裁判を始めるでしょう？ 誰もしません。ひとは訴訟を溺れさせているのです。「というのも一方は知り、見抜くが、他方は決して理解しないだろうから」⁷。これがまさにボードレールです！ ——気まずい思いをさせてしまいましたか？

ナタリー・クロン : あなたの本は身体の問題から始まります。生理学的な時間、年代順の時間に従う身体、運命のプロセスに従う身体はまた、時間の厚みの中で旅や横断をする体験の場でもあります。

フィリップ・ソレルス : それはとてもはっきりしています。この本が始まるのはまさに身体が話者に話しかけるからなのです。話者は突然身体が彼に語りかけるので少し驚かされます。私はルネ・クルヴェルの『私の身体と私』⁸（素晴らしいタイトルです！）というタイトルがずっといいなと羨んできました。彼はシュルレアリストたちとコミュニストたちの幻影のあいだで事がうまくいかなかった時、一九三五年に自殺しました。身体にも考えること言うべきことがあるのですが、それらは、身体に住んでいるひとの趣味であるわけでは必ずしもないのです。しかし誰が誰に住み着いているのでしょうか？ これが何人かの批評家、とりわけフェミニズムの批評家たちに動揺を与えたことは私も知っています。私の小説中の話者はローマのテラスにいて、「法王」の言うことを聞いています。「法王」は復活についてしゃべっています。興味深く。何故ならただたんに「キリスト」が復活したからです……。そのとき話者は「口論の口火を切」らせてしまいます——というのも彼はそれにたいする興味を表明していたに違いないからで

5 シャルル・ボードレール、『悪の花』、「祝福」、一九六八年版。

次のところから捜し出すべし。<http://www.poetica.fr/poeme-378/charles-baudelaire-benediction/>

6 ステファヌ・マラルメ、「エドガー・ポーの墓」、ポール・ヴェルレーヌの『呪われた詩人たち』より。ヴァニエ出版（メサン）、一九〇三年（第三版）、pp.43-44。このテキストは次のところで入手可能。Wikisource あるいは http://www.poetes.com/textes/ver_poemau.pdf。

7 シャルル・ボードレール、『死後出版作品集』、「新しい版のための序文草稿」、一九〇八年。「だがさらによく検討してみると、それが両者いずれにたいしてもまったく無駄な仕事であることは自明の理に思われはしないだろうか？ というのも一方は知り、あるいは察するであろうし、他方は決して理解しないだろうからだ。民衆に芸術作品の理解をふきこむには、私はあまりに滑稽さを怖れているし、このことに関しては、一法令によって、あらゆるフランス人を一挙に豊かにし、有徳ならしめようと欲するユートピストたちに似ることを怖れているからだ」。Wikisource の "Projet de préface pour une édition nouvelle" の項で序文を読むこと。

8 次のサイトで読むことが可能。<http://melusine.univ-paris3.fr/CrevelMonCorps.html>。

す——それが復活の問題です。「あなたって身体の復活を信じているの？ ——いいや、全然。あなたも自分がそれに値すると感じていないだろうし、ぼくもそう感じていない。あなたはあなたの身体とともに自分が復活すると感じる？ ——いいえ、全然！ 私たちは既に私たちに住み着いている解体よりももっと強烈な解体に向かって行くのよ。——あなたは復活したいと思わないのかな？」こうして問題が提起されます！ ところで私はこの問題を本当には提示していないのです。何故なら私はこの問題の背後にあるもの、すなわち「グノーシス」に直ちに移るからです。そういう訳で私はこの本の銘句として『フィリポによる福音書』からの次の一節を掲げているのです。「幸いなるかな、在ったという以前に在るものは、というも在るものは在ったし、在るだろうから」。私はなにも、敬虔に死を待ち、可能な限り遠い未来のいつかに復活を期待すべきだ、などと言っているのではありません。しかし私の身体が私に言うことに私が関心を持つ時、問題は提起されるのです。身体はこう思っています、私は身体にたいする十分な礼節を欠いている、と。確かにその通りです。身体が私を非難するには道理があります。しかし同時に、今現在における、直接的な復活の状態にある身体というのも、深い困惑を生み出します。このことを、キリスト紀元の初め頃エジプトのとある場所に埋められていたテキストが示しています。今この場で復活するとはどういうことか？ 「グノーシス」とはギリシア語で「知識」を意味します⁹。

フィリップ・ソレルスによる『「時間」の旅人たち』の朗読。
「私は、始まりからこのかた沈黙の中に存在している、やさしく鳴り響くひとつの音だ」。われわれはここで、われわれがキリスト紀元と呼び慣わしているものの最初の数世紀のうちにいる。そしてエジプトの農民によってたまたま発掘された文書の中にいる……。

(続きは archives sonores で聞くこと。時間三一分五四秒)

マーケティングの推奨する小説においては、ひとは連続するイメージによってひとつの映画を見ます。それとは反対に『「時間」の旅人たち』は音の小説なのです。私が書いたものは聞かれるように作られています。私は音楽のように音を使って書きます、映画のためには書きません。ほとんどの作家は映画を作るという行為に狂ったように身を投じています、ロブ＝グリエ、ウーエルベック……、もちろん全く益ないことです！ それというのも彼らは自分のエクリチュールに信頼を置いていないからです。映画が封切られないと彼らは莫大な金額を損するのです。そんな作家は取るに足りません。このことが意味するのは、彼らは耳を傾けていなければならぬような時、すなわちまさにポエジにおいて、そうしていないということです。

(朗読の続き)

ここに、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、手が触れたことのないもの、人間の心にのぼってこなかったもの」がある……。

(続きは archives sonores で聞くこと。時間三三分五三秒)

さてここでアンリ＝シャルル・ピュエック¹⁰のほうへ行くべきです。彼は天才ですが、事典で探しても見つからないでしょう。グノーシスについて二冊の本を書いています。『グノーシスと時間』、それから見事な『マニ教に関して』です。ガリマールで入手可能です。ピュエックのテーゼはとても単純でこの上もなく小説的です。彼はこう言います。「グノーシスとは主体がおのれにたいして持つ単純な意識のことではなく、そのような意識を持つことによる主体の根底的な変革のことである」。言い換えれば認識論的な読書があるということです。つまりもし私が、自分のいま読んでいるものになろうと多大な集中力をもって読書をするなら、私はある種の内的革命の中にいるということです。あの小説が語っているのはこのことです。

ナタリー・クロン : それが「精神の闘い」である？

フィリップ・ソレルス : 実際、私もあの本の中でそう言っているように、グノーシスを「精神の闘い」と呼ぶこともできるかもしれません。しかし四、五人のひとにしか「精神の闘い」が何を暗示しているか分からないでしょう。これは『地獄の季節』の中でのランボーの表現です。「精神の闘いは人間たちの闘いと同じように荒々しい」。ところで『精神の狩猟』と呼ばれていた作品の手稿を熱に浮かされたかのようにみんなが探していたことがありましたね。偽造者たちがそれを戦後に公刊したのです。モーリス・ナドールは当時お粗末な偽造品だったそのテキストにお墨付きを与えていました。ただアンドレ・ブルトンだけが「現行犯」と呼ばれるテキストの中でペテンを暴きました。私の本は彼に献呈されてもいいでしょう。というのも彼は集中した状態に身を置き、一九一九年にロートレア蒙ンの『ポエジ』を国立図書館に探しに行き、『ナジャ』や『秘法一七番』といった大きな本を書くことになる人物なのです。本質的な問題は以下のようなものです。人生のある種の経験はあなたを変貌させ、あなたに革命をもたらす、そして基本的ないくつかのテキストがあなたを助けるためにここにある、ということです。

ナタリー・クロン : 『「時間」の旅人たち』にはそのような時間な次元があるのでは……。

フィリップ・ソレルス : 永続的な精神の闘い、すなわちゲリラ戦の次元があります。ピエール・ナヴィルが死ぬ

9 Gnosie (ギ語、gnôsis 《知識》) . *Ecrits gnostiques*, Pléiade, Gallimard を見ること。

10 アンリ＝シャルル・ピュエック (一九〇二年～一九八六年)。一九五二年から一九七二年までコレージュ・ド・フランスで宗教学の教授をつとめた。

前に私に委ねた見事なテキスト『ゲリラ戦術』の中に、私がT.E. ロレンス¹¹の姿を挿入したのもそのような理由からです。ピエールの妻ドゥニーズ・ナヴィルは、クラウゼヴィッツだけでなくヘルダーリンも翻訳していました。二〇世紀における偉大な人物です。『ゲリラ戦術』は驚異的に明敏なテキストです。要約すると、あなたは砂漠にいる。あなたは非正規の、全くアルファベットを知らない戦闘員に命令する——アルファベットを知っているものよりこちらのほうがいいのです。そのほうが与えられた命令をはるかによく記憶するからです。つまりあなたは砂漠を大洋に変貌させる。あたかも船に乗っているかのように、あなたは果てしない砂の中で戦争をする。正面からの攻撃は避けることです。攻撃する、退却する、攻撃する、退却する。何しろ目的は敵が最終的にナイフでスープを飲む（見事な表現です！）にいたることなので。これは著述家にとって戦略となるものです。「ポエジ、それは戦争である」。今やあらゆる詩人が、われわれの時代のポエジの全面的な貧困の中で麻痺させられており、小さな本、小さな糞のコレクション、小さな詩を持つことだけがまんしているのは残念なことです。ポエジ、それは壮大なものです。壮大な戦争なのです！

ナタリー・クロン : それは商品と見世物に抗する戦争であると……。

フィリップ・ソレルス : そうです。商品も見世物も、みなポエジの終焉、人間存在の終りです。それはポエジの諦念的な排除です。あえて大げさな言葉を使います、私は「形而上的な」小説を作っているのです。

ナタリー・クロン : 形而上学という迂路を通じての抵抗……。

フィリップ・ソレルス : そうです……。ここでわれわれは何をしているのでしょうか？ どうして無があるというよりはむしろ何かがあるのでしょうか？ 絶えず驚かされていることです。さもないと私は退屈してしまう……。これはいたるところに現前している問いです。パスカルは言っていますよ、「私に見えるものといえば夢遊病者ばかり」。

ナタリー・クロン : そういう意味ではあなたのそれぞれの本は、戦闘の本、戦士の本だと言えるでしょうね……。

フィリップ・ソレルス : ええ。だから前進があり後退があるのです。私が攻撃する、するとひとは私を攻撃する。まったく普通のことです。『フィガロ・マダム』という雑誌でひょっこり私が見つけた言い回しがあるのですが、あなたには面白いかもしれない——お気に召します？ 召さない？ 実は私も気に入らないのですけど——、それは

ヴァレリー・ガンス（だと思えます）と名乗る記者の筆になるもので、こうあります。「フィリップ・ソレルス著『「時間」の旅人たち』。フィリップ・ソレルスはまだ勃起している」。私は出版人で友人でもあるガリマールに「フィリップ・ソレルスはまだ勃起している」という一文を大文字にしてフィガロ・マダムと署名した大きな広告を作るよう注文したいと思っています。「フィリップ・ソレルスはまだ勃起している。しかし言わば自分の身体を守るために、彼の頭は同意していない」。この途方もない上品さにご注目ください。とても『フィガロ』的です！ 「こんな言い訳をかつて家に持ち帰ったことのないひとは、手を上げなさい」。家に言い訳を持ち帰る！ われわれがどこに到達しているかあなたはイメージしていますか？ これは強調せねばなりません。というのもすでに私が『女たち』で描いていたあるものに私は触れているからです。『女たち』は強烈なインパクトを持っていました——ポケット版でも見つけられますよ。二五年前に書かれたものにもかかわらずこの小説について長々とコメントすることもできるでしょう。これはまだ古びていません。でもこのことはずっと悪くなっている。

ナタリー・クロン : 『「時間」の旅人たち』の中の母親に関するところで『女たち』からの引用がありますが……。

フィリップ・ソレルス : 「世界は女たちに属している、すなわち死に。このことについて、みな嘘をついている」。死については、もしお望みならまた後で触れましょう。でもあなたはクロード・ランズマンの見事な本『パタゴニアの野うさぎ』を全部お読みになるがいいと思います。あなたはこの騎士が死に関する真実をどのようにして語っているか、また否認の力というものが、『ショアー』を制作したとき彼の身に起こったこと関連して、いかなるものであるのか理解することでしょう。

ナタリー・クロン : グノーシスに戻ろうと思います。年代順という時間からわが身を引き離すあのやり方はいかなるものであるのか……。あなたは年代順的な時間を世代的な時間とお呼びになっています。

フィリップ・ソレルス : 「生・権力」、すなわち生物学的な時間です。あなたは墓石にそれを具体化することになるでしょう。そこにはあなたの誕生の日付けと死の日付けがあることになる。社会も家族もこの順序の中にあるすべてに気を配っています。

ナタリー・クロン : あなたの現在をニーチェの考案したカレンダーの中に組み入れるあのやり方は……。

フィリップ・ソレルス : 私の友人たちが例の映画を作っ

11 トーマス・エドワード・ロレンス、別名アラビアのロレンス。イギリスの士官、冒険家、作家。

たときその最期にローマ数字で目立たないように「一二一年」CXXI と加えたことをあなたは見ましたか？ 何故だと思いませんか？ 何故なら私は、すでに『神聖な生』以来、ニーチェによって打ち建てられたカレンダーを引き継いでいるからです。一八八八年九月三〇日の啓示から出発して新しいカレンダーを作ろうというニーチェの身ぶりは度を越して野心的です。私はそれを承認しているのです。このことを『神聖な生』でもっと詳しく説明しています。これは何を言わんとしているのでしょうか？ とても単純です。あらゆるひとびとはキリスト教のカレンダーを採択している。これはもっぱら経済的・政治的なカレンダーとなってしまう。こんにち金融取引で二〇〇九年以外の日付けで署名することはできません。この日付けがなければこの取引は有効と認められないでしょう。この日付けの中にあるかぎりあなたはかなりの数の解釈に順応せざるをえません。キリスト教のカレンダーは地球全体のためにある。ところでひとがキリスト教徒であるのは三人に一人か四人に一人であって、中でも……。まあそういうわけで私はニーチェの言う「救済暦」¹² 一二一年にわれわれはいると思っているのです。

ナタリー・クロン : この本に出てくる場所について取りかかってもよろしいでしょうか？ 実際、ここには時間の次元がありますが、空間の次元も存在しています。たとえばパリの七区という場所にいるあなたが見い出されるのですが……。

フィリップ・ソレルス : 七区、あそこは統一性のある場所です。そういう場所がひとつは必要だったと言っておきましょう。私はあの辺りを歩きまわっています。私はガリマール出版社に仕事をしに行っているのです。あるとき突然、場所の統一性という考えが生き始め、鳴り響きだし、時間の多様性に向かって開きだしたのです。歴史があそこにはある。とても興味を引くものです。互いに対立し合う個人に満ちています——諸個人が対立し合うのは幸いなことです。それがつねにガストン・ガリマールの「精神協定」の主義でありました——そしてこのことが私には異常なほど小説的に思えたのです。だれがあ場所を通りながら息をしていたのか。互いに挨拶もせず、敵でさえあり、ときには銃殺されていたようなひとびとです。こうしたことが分かるのは驚異的なことです。モーリアックもこう言っていました、「戦争が終わり、今度はマルローとアラゴンのあいだで権力闘争があった。どちらが最初に他方をだれに銃殺させるか競っていた」。これを事実として読むこともできます。しかしたとえばジョルジュ・バタイユ（彼には大きな讃嘆の念を私は持っていました）のような人物と何人か知り合いになり、接触し、彼らの本を読み、起こったことがどんなことだったか知るの、とても小説的です……。ロートレアモンの『ポエジ』が五部しか残ってい

なかったという事実を強調しておきます……。さらにブリュッセルの全世界活版印刷同盟から出版された『地獄の季節』の何部かは、小さな通りで一フランで売られています。このことに気づくまでにどれほどの時間が必要だったことでしょうか。それゆえ例の言説を緩和する必要があります。つまり商品が必ずしも道理を持つわけではないのです。

ナタリー・クロン : あなたの挙げる「時間の旅人たち」の中ではロートレアモンとランボーがやや別格の地位を占めているのですか？

フィリップ・ソレルス : もちろんです。何故なら結局、とても奇妙なあの年月以来ひと歩も進んでいないからです……。

ナタリー・クロン : 「一歩も進んでいない」とはどういう意味ですか？

フィリップ・ソレルス : これに比較し得るような——フランス語圏の文学を取り上げるとすればですが——新しさを私はどこにも見ないということです。あなたは私に好きな本を一〇冊挙げてくれと言ってきましたね。頭を抱えました。ホメロス、聖書、などと言おうか自問しました。しかし挙げだしたら切りがない。そこで私はフランスの作家一〇人だけを挙げるとあなたに返答したのです。パスカル、サン＝シモン、ヴォルテール、シャトーブリアン、ボードレー、ロートレアモン、ランボー、ブルースト、ブルトン（『シュルレアリスム宣言』）、そしてセリーヌ（『もう一度だけの妖精劇』）です。海外の作家がいとおっしゃるでしょう。確かにいない。と言うより、いるのです。彼らは全員われわれにとって外国人です。彼らにとって外国人となっているのはわれわれの方なのですが。

ナタリー・クロン : どうしてこんな選択なのでしょう？ というのも私はダンテを挙げるあなたが見られるものと期待していたからです……。

フィリップ・ソレルス : いや、私は、久しい以前から慌ただしさにまぎれているフランス人は、もはやその過去、現在、未来に相応しくないと考えているのです。実際、過去を知らない者は未来にあることも出来ません。フランス人にこれらの偉大な事物を思い出させねばなりません。ですから私はフランスの作家だけを挙げたのです！ それにまず私自身がフランス語で書いていますしね。アメリカ人が言うように「私はとてもフランス的」I am too French なのです。

ナタリー・クロン : あなたはまた、ある対談で、ご自

12 Beaubourg の原文では《Père du Salut》となっているが *Les Voyageurs du Temps* の本文にあたってみると《l'ère du Salut》となっている。おそらく誤植と思われるのでこの翻訳では「救済暦」と訳しておく。Cf. *Les Voyageurs du Temps*, Gallimard, 2009, p.78.

身のことをフランス出身のヨーロッパ作家であると定義なさっていましたね。

フィリップ・ソレルス : はい、そのことに大変こだわっています。フランス出身であるが、まず第一にヨーロッパ人であること。ただヨーロッパはうまく行ってません。フランスは自分がヨーロッパの首都であることを知るべきなのに、ヨーロッパの貧乏国だと公言している。これは自己憎悪です。この罪悪感にはぞっとします。

ナタリー・クロン : しかしこの「フランス出身のヨーロッパ」作家という理念ですが……。どうして世界的な作家ではないのでしょうか？

フィリップ・ソレルス : 「世界的」という言葉が好きでないのです。指摘しておく、知識人たちも「ヨーロッパ」を完全に馬鹿にしています。彼らにとってすべては中近東とアメリカ合衆国で起こっているのです。イタリア、スペイン、ドイツがあるというのに……。ヨーロッパには本当に素晴らしい生活があります。

ナタリー・クロン : だとしますと、私があなたに一〇冊の本をお尋ねした時、あなたは一〇人のヨーロッパ作家を挙げることもできたわけですね。

フィリップ・ソレルス : 今現在のヨーロッパ作家ですか？

ナタリー・クロン : いえ、あの「時間の旅人たち」の中からです。

フィリップ・ソレルス : ああ、それなら早く片がつく。もっとも偉大なヨーロッパ作家を取り上げることになるでしょう。あなたがひとたびシェイクスピアを有するや、あなたは「英語」を持つことになる。ダンテを有するや、「イタリア語」を持つ。セルヴァンテスを有するや、「スペイン語」を持つ、等々。しかしフランス語の状況はヨーロッパの他のすべての国と全然違うのです。フランス文学はもっとも繁殖力があり、もっとも矛盾していて、もっとも豊かです。その点でかなり他に抜き出しています。他のところではどこにも創始者がいます。ところで、フランスには、モンテーニュがいるとあなたが言うと思います。しかしまた他のものもあるのです……。それゆえにこそこの問いはひとを困惑させ、それにたいする答えはイメージから脱却しなければならないのです。何故ならフランス文学はあまりにも微妙で、あまりにも複雑で、あまりにも矛盾しており、あまりにも逆説的だからです。サドとボシュエを愛することはできない——何であれ……——あるいはサドとパスカルを愛することはできません。フランス人であることの恥ずかしさは、フランス大革命の周辺に集中した歴

史的な理由によって容易に説明することができます。とてつもない罪悪感があるのです。これこそ私が「押し入れの中の死体」と呼んでいる秘めた悪事です。近年に関して言えば、一九四〇年から一九四二年の間のヴィシー、「ヴェロ・ディヴ」、反ユダヤ主義、ファシズム、対独協力があります。それから、もはや「ドイツ・ソヴィエト」協定と呼ぶべきではない「ナチス・スターリン」協定があります。続いてアルジェリア戦争があります。しかも当時はこれを「戦争」と呼ぶことは禁じられていて、「秩序の維持」と言わねばならなかったのです。私は軍事病院に何か月もいました。自分が何をしゃべっているのか分かっています。それから六八年です。始末しなければならない亡霊です……。これがおのれを恥ずかしがることを止めないひとつの国の姿です。「あなたがたはあなたがたの偉大な著述家たちに値しない、あなたがたは存在するに値しない、これほど凡庸なのだから」——これをボードレールは凡庸なひとびとの専制と呼んでいます——と言われれば、フランス人はうれしくはないですよ。残念なことです！

ナタリー・クロン : あなたはご自身が孤独だと感じられますか？

フィリップ・ソレルス : 全然！ あらゆる死者がここにいるのです。群れをなして助けを求めにやってくるのです。毎晩彼らはここにいます、まるでハムレットの中でのように！ 私は病んだ生者のための時間を持ちません。それに死者たちは危険に瀕しているのです。「死者たち、哀れな死者たちは大なる苦悩を持っている」とボードレールが見事に言っているように。こうした声のすべてがどれほど感動的かあなたには分からないでしょう。私は全く孤独ではなく、私の全蔵書と連帯しています。

ナタリー・クロン : 今夜会場にはたくさんの方がたがいらっしゃるので、質問がおありの方はどうぞ発言なさってください。

ジョージアヌ・サヴィニョー : 二つ質問がしたいのですがその前に指摘したいことがひとつあります。文学関係のジャーナリストという私の職業はかなり中傷を受ける——時には正当に——ものなのですが、それでもこの職業を良く言いたいと思います。確かに『「時間」の旅人たち』を読み、それについて知的な批評を書くには、文学を愛し音楽的な耳を持たなければならないと思います。ところであなたの本が出版された日、主だった批評家たち（その中には今夜ここにいらっしゃるナタリー・クロンとミシェル・クレピュ、それからここにはいらっしゃらないフィリップ・ランソン、またマルク・ランブロン——みな読む術を心得ているひとびと——がいます）は、『「時間」の旅人たち』をきわめて肯定的に批評したのです。そのような集結があったわけですが、この種のものはいつもあるわけではありま

せん。フィリップ・ランソンは『リベラシオン』誌上でときどき好んであなたと対談していますが、彼はその対談にちょっと通ぶって「ソレルス、特級格付けワイン二〇〇九年」というタイトルを付しています。もちろん愚かな記事もそのあとありましたが、それほど重要ではありません。結局自分が何について語っているのかわかっていないひととがいるものです。いつでもそういうひととはいます。

さて『リーヴル・エブド』誌が述べたのは、あなたはこの本の中で自分の基礎となるものをある意味でもう一度引き締め直している、ということでした。これは私にはとても正当だと思われるのです。個人的に申せば、私はこの本をある種の見出された時間——ブルーストを暗示することなく——として見ました。これまであなたの作品の中であなたが行ってきたこと、『楽園』であろうと、アヴァン・ギャルドと看做されたテキストであろうと、『スチュディオ』であろうとですね、それらを再集結させてそれらに関連を持たせるひとつのやり方として見ました。『スチュディオ』ではあなたは特にヘルダーリンとランボーに賛辞を呈しています。あなたは全体化しようという意志をいくらかお持ちだったのでしょうか？

第二の側面はあなたの作品によく現われているもので、これを私は強調したいのですが、ナタリー・クロンはまったく触れなかったものです。すなわち社会批判という側面なのですが……。

フィリップ・ソレルス : あなたの最初の質問にお答えすると、私は同じ地層をさらに深く掘っていると自分では思っています。驚くべきなのは、私はこれらの地層を地質学的にも歴史的にも文学的にも哲学的にも暗唱できるほど熟知している——これについてはどなたからでも読解の挑戦は受けて立ちます——と思っているにもかかわらず、掘り進むと私はいつも何か新しいものを見つけるということです。私にとって重要なのは次の問いです。ある種のテキスト、これは必ずしも宗教的なものにかぎりません——しかし『聖書』の上にひとは長い間留まることができます、『タルムード』もそのために作られています——だがダンテやヘルダーリンのような重要なテキストは、どうして汲み尽くし難いのか？ 私は『イリュミナシオン』の活字が様々な一〇冊の校訂版を買いました。私は本質的なものにほとんど届くことができると思います。『エクスプレス』誌で、これはいつも私を酷評している雑誌ですが、ある女性記者がこんなことを言いました。「強みとなる点がひとつある。それはランボーについてだ。ひとは『地獄の季節』や『イリュミナシオン』を再読しないで済ますことができる」。これは異常なことです。何故でしょう？ 何故なら『エクスプレス』誌は、ジャン＝ジャック・ルフレール（ランボーの専門家）の本を大々的に宣伝していたからです。それにルフレールはロートレアモンとランボーに関して私に祝福の手紙を送ってきました。少なくとも彼は専門家です。また彼は『エクスプレス』誌で良く取り扱われていたのだから、あまり大きさに言うべきではなかった。むしろ彼なら訂正の手紙を私に書けたはずですよ。

ら、あまり大きさに言うべきではなかった。むしろ彼なら訂正の手紙を私に書けたはずですよ。

社会批判に関する二番目の問いについてですが、私はこれを止めません。ある種のひととは、社会は必要不可欠である、社会は良くない、社会は改革することができる、それ以上に社会に革命を起こすことができる、と考えていますが、「社会」はいまや「神」なのです。『メトロ』誌でのあの批評は、個人が社会によってすべて決定されているという事実を強調しています。つまり個人は社会的に生まれ、社会的に生き、社会的に労働し、社会的に死ぬのです。この視点から見ると、まるでひとはこの地球を監視の収容所にしようとしているかのようです。これは現在進行している最中です。要するにすべては社会的である。オーウェルはこのことがやって来るのを見ました。しかしこの観念をより洗練させることが残っています。もっと遠くへ行かねばなりません。別の分析が必要です。たとえば生・権力とか、種の再生産とか、技術とかについてですね。これらの理論はいまブームの真っ盛りです。このような閉鎖性と比べた場合、自由とは何でしょう？ 私が立てているのはこのような小さな問いですが、私はそれを読書の能力のうえに立てるのです。何故なら読書の能力こそ、現行の専制政治が「ア・プリオリに」怪しいと睨んでいるものだからです。このことはグロテスクな形のもとで見られました。たとえばラシュディーにおいてですね。しかしながら重要なのは厳格な検閲のほうではなく、ひそかに進行する、穏和な検閲のほうです。私は後者を「魚を溺れさせること」と呼んでいます。事実、六〇〇冊もの本があり、すぐに消えてしまうであろう著者や二年後にはもう何の関心も引かなくなるであろうアングロ・サクソンの作家たちのために歯止めのないプロパガンダがあるとき、ひとが基本的な著者に興味を抱くようにするにはどうすればよいのでしょうか？ しかし危機も、それが嵐や、本の売れ行き不振、全体的な愚鈍化などを伴ってくることで、ひとつの利点ももち得ることがあります。事実一八七〇年はそんな年だったのです。そこからランボーとロートレアモンが出てきたのです。いずれにしても私の本は一月に出版されました。幸いなことに、今のところ私は困難を回避できていますが、やがてもっと悪くなるでしょう。

ジョージアヌ・サヴィニョー : ここである人物を紹介したいと思います。このあと発言していただけるでしょう。彼の名はティエリー・シュドゥールといいます。彼は『楽園』に関するまったく非凡な博士論文の口頭審査を、審査委員会の祝福とともに受け終わったばかりです。いつかこの博士論文が、『楽園』を読みその音楽と響きに身を委ねるがままにしたひとたちにとってだけでなく、ティエリー・シュドゥールが解説するのに成功したすべての暗示を確かに全部は理解しなかったひとたちにとっても、出版されることを望みます。

ティエリー・シュドゥール : 私は『オデュッセイア』を話題にしているジャック・アンリックを踏襲しようと思ひ、オデュッセウスのことを考えていました。オデュッセウスは時おり死者たち、とりわけ彼の母に会いに行きます。それからあなたはハムレットに言及されました。ハムレットは死者を探しに行きません。むしろ死者によって探されます。この本を読んでいる最中私はこうひとりごちていました、これらの著者を探しに行くのはあなたの方なのか、それとも彼らの方があなたのところへやって来るのか？ 言い換えると、たまたまあなたのもとに委ねられた本があるということなのか、それともあなたはほとんど百科全書的に読書をし、あれらの「時間の旅人たち」をただ迎えに行きさえすればよかったのでしょうか？ 彼らの方へ向かったのはあなたの方でしょうか、それとも彼らの方があなたのところに来たのでしょうか？ これはおそらく両方向で起こることでは？

フィリップ・ソレルス : それは両方です。確かに私はいつでも基本的な音をここかしこに探しています。たとえばカフカにおいて私はそのような音を見出します。何故ならその音が稀であり、ひとが彼について抱いてきたイメージときわめて矛盾しているからです。私は「垢を落とす」ように努めています。これはダンテが用いた言葉です。宗教団体の垢を落とすということですね。大変な忍耐を要しますが、しかしこの仕事が理解される必要はありません。私が彼らの方へ行くのは、それ以外にどうにもできないからです。「時間の旅人たち」であって、他のひとびとではありません。さもないと私は時間を無駄にすることになります。同じものを一五万回再読しても、それが新しいと思われるというのは驚くべきことです。私に合図を送ってくるというのはこういうことなのです。また同時にXなりYなりの旅人によって具肉化されている新しいものが私のほうに来るとも言い得るでしょう。従って、私が個人的に向上するに依じて、私は徐々に基本的な音に近づくのです。実際私には対話する相手がいるのです。

マキャヴェリの崇高な手紙があります。彼はフィレンチェに追放されています。すべてがうまくいきません……。しかし彼は、死刑判決を受けたダンテのようではありません——ところで死刑判決を受け、『神曲』を書いているダンテほど小説的なものがありますか？ マキャヴェリは農作業用の森で一日を過ごしたあと夕方帰ってきます。そしてアリストテレスと対話を始めるのです。数千年もの間にはこんなひとびともいたのです、ちょうど『聖書』を読んでいたユダヤ人のようなひとびとですね——しかも彼らがそうしたのは正しかったのです。それが耐え抜くことを可能にするのです！

ジョジアーヌ・サヴィニョー : ナタリー・クロンの前に別の本があります。『すこぶる晴天』というタイトルです。これについてひとこと言っただけですか？

フィリップ・ソレルス : 著者はギョーム・プティという名の青年で、突然彼は、誰に頼まれたわけでもないのに、私のテキストを掘り起し、この論集を編み始めたのです。三〇歳でルーアン在住。失業者で、「社会的な」人生にはなんの希望も持っておらず、全然「社会的」ではなく、何か「社会的な」ことをしようとも思っただけでもありません。彼はまさにその正反対のことをしました。たまたまこれが出版されるということもあり得たわけですね。彼はスタンダールが善意の読者と呼んだひとびとの一人です。スタンダールはたびたびそのような読者に訴えています。特に『リュシアン・ルーヴェン』の序文で、「おお、善意の読者よ」、と。一方彼は『パルムの僧院』を「ハッピー・フュー」happy few への呼びかけで終えています。「数少ない幸福なひとびと」、彼らは時間とともに本当の数字を啓示するものとなるのです。

おわりに

以上が「ポーブル」の全訳である。映画に成り得るような連なりのあるイメージを持った小説や、社会的、心理的、家族的な葛藤やトラブルを描く小説を否定している点で、ソレルスはアンドレ・ブルトン¹³などに連なる書き手であると言い得るだろう（事実この小説はブルトンに捧げられてもよいとソレルス自身言っている）。ソレルスは音で書くという。つまり小説というジャンルにおいても「ポエジ」が実践されているのである。そしてポエジとはソレルスにとって「精神の闘い」（ランボー）なのでもあった。「精神の闘い」を繰り広げたのはランボーだけでなく、ヘルダーリン、ロートレアモン、カフカといった「時間の旅人たち」も、彼らなりの流儀で実践した。ソレルスは彼らのテキストを小説中に多く引用する。しかし今回の小説は、このような次元にグノーシスという新たな次元が加わっている所が読解の深化を示していると思われる。

ジョジアーヌ・サヴィニョーの発言によるとソレルスの新作は概ね（『フィガロ』などを除いて）好評だったようである。それにしてもこのような筋らしい筋もなく、映画になりうるようなイメージもなく、多くの作家からの引用の織物のようなテキストを、肯定的に迎え入れることのできるフランスの文芸批評はやはり懐が深い。というよりそのような引用の織物を編むこと自体がモンテーニュからロートレアモンへ至るフランス文学のひとつの伝統なのかもしれない。

13 たとえば『シュルレアリスム第一宣言』（一九二四年）の中の心理小説についてのブルトンの次のような発言を見られたい。「人生の波が彼をさらい、ころがし、つきおとすかのように思われたとしても、この主人公はいいかかわらず、例の出来合いの人間タイプからぬげだせないでいるだろう。それがどんな人物であろうと、私にとってはとるにたりない相手である以上、そんなものはおよそおもしろくもないただのチェス遊びにすぎない」。『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、巖谷國士訳、岩波文庫、二〇〇六年、p.16。

彼自身によるフィリップ・ソレルス
—著者による『「時間」の旅人たち』についての論評—

小山 尚之

(東京海洋大学大学院海洋科学系海洋政策文化学部門)

要旨： 本稿は二〇〇九年二月九日にポンピドゥー・センター（通称ポープール）において行われたフィリップ・ソレルスとナタリー・クロンとの、ソレルスの新作『「時間」の旅人たち』をめぐる対談を翻訳したものである。ソレルスの『「時間」の旅人たち』も二〇〇九年一月に出版されているので、この対談はこの小説が出版されて早々に行われたもののようなのである。この対談では、小説というジャンルについてや、何がソレルスにとって小説的であるのか、あるいは読むことと書くこと、四次元的時間とグノーシスについて、また「精神の闘い」としてのポエジ、などについて語られており、著者自身による自作の解説ともなっている。『「時間」の旅人たち』を読むさいの良き手引きであるとも言えるだろう。

キーワード： フィリップ・ソレルス、ポープール、ナタリー・クロン、時間の旅人たち